

Reminiscence

IN DESTINY PUPIL



アクア

イラスト/まりも

Reminiscence IN DESTINY PUPIL

目次

Reminiscence IN DESTINY PUPIL..... 4

Reminiscence IN DESTINY PUPIL



「ピーター」

リディアの村に住むミナキ・フィラデルフィアがリディアの森に住むピーターに会いにリディアの森に足を踏み入れると、

「よ、ミナキ」

木に座っていたピーターが持ち前のすばしっこさですばやく木から降りてきた。

「遊びに来たのか」

「うん」

「じゃあ遊ぼうぜ、ミナキ」

「ピーター、遊ぼう」

ミナキはピーターと遊んだ。

リディアの森はたくさんの美しい木々や草花、役に立つ薬草が生えている。自然が好きなミナキとピーターにとって、ここは良い遊び場所だ。

ミナキとピーターは仲がよく、戯れながら歩く。

「ミナキ、見て」

5 Reminiscence IN DESTINY PUPIL

ピーターが鮮やかに咲いている草花を指差して言った。

「うわあ！ きれい！」

とミナキは喜んだ。

「木々の緑が美しいね」

ミナキが辺りの木々を見渡しながら言うと、

「俺が着ている服の色のようだよ」

とピーターが自分の緑の服を指差して言った。

「そうだね」

「俺は緑が好きなんだ」

「私もよ」

ピーターがミナキの髪を見て、

「おめえの髪の色も緑だな」

と言うと、

「うん、ピーターが着ている服の色と同じだよ」

とミナキが言った。

「俺が着ている服の色もおめえの髪の色も同じ緑だからいいな」

「そうだね」

「ピーター、草花遊びしよう」

「ああ」

ミナキはピーターと草花を摘んで、花輪を作った。

「木の枝にかけたいわ」

ミナキは花輪を木の枝にかけようと木に登ろうとしたが、うまく登れない。

「ダメだわ」

「俺に任せろ」

木登りに慣れているピーターはさささつと木に登って、木の枝に花輪をかけた。

「どうだい」

「すごい、ピーター」

ミナキが木の上にいるピーターを見て言った。

ピーターは「よっ」と、大きな声を出して、木から地面に飛び降りると、ミナキと一緒に木の枝にかけた花輪を見た。

「木に花が咲いているようで、いいな」

「うん」

しばらく歩くと空き地があった。

「ここに草木がいっぱいあったらいいね」

「そうだな」

ミナキは拾った草木の種をピーターに見せて、ここに植えたいと言ったが、草木が立派に成長するには長い年月がかかるので、成長するまで待てない。

「いいね、ここに植えよう」

「でも、成長するまで待てないよ。長い年月がかかるから」

「大丈夫、森魔法で成長させることができるから」

「本当に？」

「ああ」

ミナキはピーターの言うことを信じて、

「じゃあ、植えるね」

と言って、空き地に草木の種を植えた。

「ピーター、お願い」

「ああ」

ピーターは森魔法を使った。ミナキが植えた草木の種が発芽して、すくすくと成長した。あっという間だった。

「どうだい」

ピーターが成長させた草木を指差して言うと、

「すごいわ、ピーター」

と、ミナキが言った。

空き地が草木でいっぱいになった。

「うん、空き地が草木でいっぱいになったら、人が通れなくなるな」

「通路はあったほうがいいから、通路にしたいところの草木は森魔法で枯らしていいかな」

ピーターが枯らしたい通路にしたいところの草木を指差して言うと、ミナキは枯らしてはかわないそうだと思いつながら、

「いいよ。人が通れるようにするといいいからね」

と言った。

「よし」

「ピーター、お願い」

「ああ」

ピーターは森魔法を使った。通路にしたいところの草木の花や葉が枯れて落ちた。

「これで人が通れる通路ができたな」

「うん」

「枯れた草は埋めると土に還る。埋めよう」

「うん」

ピーターはミナキと枯れた草を「枯らしてしまつてごめん……」という思いで、埋めた。

「土に還るんだね」

「ああ」

ピーターは森の力を利用する魔法、森魔法を使って、草木を植えると成長させたり枯らしたり制御できる。

ミナキはピーターの森魔法でこのリディアの森が立派な森になったらいいという思いを、ピーターに伝えた。

「そうだな。俺が住む場所であり、俺とおめえの良い遊び場であるだからな」

「ピーター、森魔法を使って、私とこのリディアの森を立派な森にしよう」

「ああ」

「もつと遊ぼう、ピーター」

「ああ」

「ピーターと遊んでいると楽しいわ」

ミナキにとって、好きな自然を操るピーターは、良き遊び相手だった。

ピーターはミナキのおさななじみである。リディアの森に住むが、ミナキが住むリディアの村に足を踏み入れることはないの、ミナキと会うようになったのは、ミナキがリディアの森に足を踏み入れるようになってからだ。森に住んでいるので、いわゆる森の力を利用する魔法、

森魔法を得意とする。ミナキが大好きだが、結構シャイなので言い出せない。逆におさななじみなので言わないほうが良いと本人は言っているのだが……。

ミナキがピーターと遊んでいると、リディアの村から鳥が飛んで来た。

「おい、鳥が飛んで来たぞ」

「トリルだわ」

「トリル？」

「うん、ここトリディアの村を歩き来している鳥なの」

「へえ」

ピーターはリディアの森に住んでいるが、トリルがリディアの森とリディアの村を歩き来していることは知らなかった。

「トリル」

ミナキがトリルに向かって手を振ると、トリルはミナキの手のひらに飛んで来た。

「キーキー」

「お父さまが呼んでいるのね」

「キー」

「わかったわ」

「ミナキ、おめえ、こいつが何を言っているのか、わかるのか？」

「うん」

「すごいな」

「何となくだけどね」

「ふうん」

トリルはリディアの森に生息する鳥である。

「怪我をしたのか、このまま放っておくわけにはいかない、私のところに来なさい」

リディアの森で怪我をしていたところをリディアの村に住むミナキの父であるガザ・フィラデルフィアに拾われた。

「私のところに来るなら、名前をつけてやらないとな」

ガザに「トリル」と名付けられた。

「トリル、一緒に住もう」

ガザが住むリディアの村に住むことになった。

「怪我を治してやるからな」

ガザに怪我の手当てをしてもらった。

それ以降、なつくようになった。リディアの森とリディアの村を行き来するようになり、リディアの村に住むガザとコミュニケーションをとっている。

「ピーター」

「ん」

「遊んでいる時に悪いけど、私、お父さまが呼んでいるからリディアの村の家に帰るね」

「そうか」

「ごめんね」

ミナキはピーターの肩に手を置いて、申し訳なさそうに謝った。

「いいよ。ミナキのお父さんが呼んでいるのだから」

ピーターはミナキの手を引いた。

「リディアの村の家で何かあったのかわ」

「また遊びに来いよ。俺はいつでもここにいるから」

「うん」

ミナキは笑顔を残して、

「トリル、リディアの村の家に帰ろう」

飛んで行ったトリルのあとを追うように走って行った。

「じゃあね、ピーター」

ミナキが走りながらピーターのほうを振り向いて手を振ると、ピーターは、

「またな、ミナキ」

とミナキが見えなくなるまで手を振った。



ミナキはリディアの村の家に帰るため、ピーターと別れた。

ミナキがリディアの村の家に帰ると、スター・ブロンドがいた。

「お帰り、ミナキ」

「ただいま、スター、来ていたのね」

「うん、ミナキのお父さまに呼ばれてね」

スターはリディアの隣にあるウルに住むミナキのおさなじみである。月の力を利用する魔法、月魔法を得意とするムーンナイトで、さらに回復魔法を得意とする。ミナキの父であるガザとは顔なじみであり、ガザに呼ばれて、リディアの村の家に来ている。

ガザはスターの回復魔法で異世界から人間界に迷い込んだ時に重傷を負ったゴルティナの傷の治療をしている。

ガザとゴルティナの出会いにはリディアの森だった。

トリルとリディアの森を散歩していたガザは重傷を負って気を失って倒れていた幻獣界の幻獣、ゴルティナを見つけた。

「しっかりしなさい」

ガザが呼びかけてもゴルティナは答えなかった。

ゴルティナをこのまま放っておくわけにはいかないと考えたガザは、ゴルティナを抱き抱えて、介抱した。

「う……」

「気がついたか」

「ここは？」

「人間界だ」

「……」

目を覚ましたゴルティナはここが人間界だとわかった瞬間、幻獣界の幻獣は人間界の人間を嫌っているため、ガザに思いを寄せることはなかった。

「私はガザ・フィラデルフィア。動くこともままならないほど重傷を負っているようだね。時間をかけて私が治してあげよう。ゆっくり休みなさい」

ガザはゴルティナが人間界の人間ではないことはわかっていたが、勇敢で優しい性格からゴルティナに優しく接した。

「ガザ、ありがとう。私はゴルティナ」

「ゴルティナ」

「あなたとこれからも、ずっと一緒にいたい」

ゴルティナはガザの優しさに惹かれ、ガザを愛してしまい、人間界と幻獣界との混血児、ミナ

キを出産した。

「ミナキ、頼みがある」

「何、お父さま」

「スターの回復魔法だけではゴルティナの傷の治りが遅いので、スターと一緒にリディアの森に生えている薬草を摘んで来て欲しい」

「リディアの森に薬草が生えているのね」

「そうだ」

「ごめんなさい、ミナキのお父さま、私の魔力が未熟で」

スターはガザに謝った。

「スター、謝ることはない。ゴルティナの傷が重いからだ。仕方がないよ」

ガザがスターの肩に手を置いて言った。

「スター、あなたにはとても感謝しているのよ」

ベッドに横たわっているゴルティナがスターに笑顔で言った。

「ミナキのお母さま」

ガザはスターの肩に置いた手を引くと、

「私が薬草を摘みにリディアの森に行ってもいいのだが、動けないゴルティナをここに置いて行くわけにはいかないからな」

そう言いながら、子供であるミナキとスターに薬草を摘みにリディアの森に行かせていいものかと悩んだ。

「大丈夫か」

「ガザ、大丈夫よ。ミナキとスターは幼い頃から魔力を持っているから」

ゴルティナの言う通り、ミナキとスターは幼い頃から魔力を持っているので、魔法が使える。ゴルティナは危険に直面しても魔法を使って対処できると思いき、大丈夫だと言った。

「そうか」

「ガザ、あなたに傍にいて欲しいの」

「わかったよ、ゴルティナ」

ガザはベッドに横たわっているゴルティナの傍にある椅子に座った。

「お父さま、大丈夫よ、スターと一緒に、リディアの森はピーターと遊びによく行っているから」

「そうだな」

不安だったガザは安心した。

「ミナキ、これを持って行きなさい」

ガザは袋をミナキに渡した。

「摘んだ薬草はこれに入れるといい」

「わかったわ」

ミナキはガザから袋を受け取った。

ガザはスターの側に行つて

「スター、ミナキのことを宜しく頼む」

とスターの肩をポンとたたくと、

「はい、ミナキのお父さま」

とスターはガザに返事をした。

ゴルティナはスターを見て、

「スター、ミナキをお願い」

と言うと、

「はい、ミナキのお母さま」

とスターはゴルティナに返事をした。

「スター、行こう」

「うん」

ミナキはスターとリディアの村の家を出て、リディアの森へ向かった。

「気をつけてな」

ガザはミナキとスターの背中を見送った。

屋根に止まっているトリルは走って行くミナキとスターの後ろ姿をじつと見ていた。

ミナキがスターとリディアの森に足を踏み入れると、ピーターが立っていた。

「ミナキ、遊びに来たのか」

「ううん、スターと一緒に葉草を摘みに来たの」

「スター？」

ピーターはスターをあまり知らなかった。スターもピーターをあまり知らなかったので、
「ミナキ、この子誰？」

とピーターを指差して言った。

「この人はピーター、ここ、リディアの森に住んでいるの。私の良き遊び相手よ」

「ピーターね」

「宜しくな、スター」

「ピーター、スターはリディアの隣にあるウルに住んでいるの。私のお父さまの顔見知りよ」

「宜しくね、ピーター」

「ああ」

スターとピーターは互いに笑顔を見せた。

「薬草を摘みに来たなら、薬草がある場所はモンスターが出現する危険な場所だから俺も一緒に行くよ。心配だからさ」

「ありがとう、ピーター」

「薬草がある場所はモンスターが出現する危険な場所なのね」

「そうだ、だから注意しろよ」

「わかったわ」

リディアの森に住んでいるピーターにとってここは庭のような場所である。だから危険な場所とかいろいろなことをピーターは知っている。

「さあ、行こうか」

ミナキとスターは先頭を歩く。ピーターの後に続いて歩いて行く。

「ミナキ、何のためにスターと一緒に薬草を摘みに来たのだ？」

「お母さまの傷を治すためよ」

「私の回復魔法だけではミナキのお母さまの傷の治りが遅いから」

「そうか、ミナキのお母さんの傷が深いからか、大変だな」

「お父さまが薬草をスターの回復魔法と併用すれば、お母さまの傷の治りが早くなるかと思ってね」

「そうだと思うぜ、薬草は傷を治す効果があるからスターの回復魔法と併用すれば、ミナキのお

母さんの傷はすぐに治るぜ。きつとな」

「ピーター」

ミナキ、スター、ピーターがしばらく歩いて行くと、通り道を塞ぐように生えている木がある。このままでは通れない。

「邪魔な木ね」

ミナキは通り道を塞ぐように生えている木を動かそうとするが、通り道を塞ぐように生えている木は頑丈なのでびくともしない。

「ダメだわ」

「私に任せて」

スターは剣を構えた。

「伐ってやる」

スターが通り道を塞ぐように生えている木を伐るために剣を振るおうとすると、ピーターはスターの剣を持つ腕を掴んで、

「伐らないでくれ」

と止めた。

「止めないでよ、このままでは通れないよ」

「こここの木々は俺の友達なんだ。だから伐らないでくれ」

「え？ ピーターの友達？」

「そうだよ」

「この木々はピーターの友達なら伐ったらダメよ、スター」

「でも、伐らなければ、通れないよ」

「大丈夫、俺に任せてくれ」

ピーターは森魔法を使った。通り道を塞ぐように生えている木がどいてくれるように動いた。

「わあ」

「木がピーターの言うことを聞いたわ」

「これが俺が得意とする森の力を利用する魔法、森魔法だ」

リディアの森の木々はピーターの友達であり、ピーターが得意とする森魔法は森の力を利用するので、力の源になっているのである。だからピーターは伐られると、自分にとって辛いことであり、悪いことなので、大切にしている。

スターはピーターが得意とする森の力を利用する魔法、森魔法を見て、ピーターが通り道を塞ぐように生えている木を伐らないでくれと言った理由がわかり、

「そう、だから伐らないで欲しいと言ったのね」

と言った。

「そうだよ」

「ごめんね、ピーター」

スターはピーターに謝った。

「わかってくれたのならいいよ」

「ピーターがいて良かったわ。いなかったら知らずに伐っていたから」

「そうだね。俺がいて良かったよ」

「うん」

「もうすぐ薬草がある場所だ。モンスターが出現するから注意しろよ」

「わかったわ」

「さあ、行こう」

ミナキ、スター、ピーターが薬草がある場所に辿り着くと、ガサガサと茂みをかき分ける音が聞こえた。

瞬時にミナキ、スター、ピーターは反応した。次いで真正面にある森の奥に、モンスターの影を見つけた。

「モンスターだ」

ピーターが叫んだ瞬間、ミナキ、スター、ピーターがモンスターに注意をする間もなく、モンスターが突然襲いかかってきた。

「うわあ」

「きゃあ」

モンスターへの攻撃をまともにくらってしまったミナキ、スター、ピーターは倒れた。

「ミナキ、スター、大丈夫か？」

「何とかね」

「大丈夫、ピーターは？」

「俺は、うっ」

ピーターは苦しんだ。

「どうしたの、ピーター」

ピーターの顔色が悪くなっていく。

「ど、毒を受けてしまった」

「ええっ」

ミナキとスターが驚いた。

「こ、このモンスターはアスピスだ、毒を持っている」

ピーターはアスピスのことをミナキとスターに教えた。

「そうなのね」

アスピスはとぐろを巻いて、ミナキ、スター、ピーターからの攻撃に備え、防御姿勢をとっている。

「ううっ」

ピーターは苦しんでいる。

「ピーター」

「スター、回復魔法でピーターを解毒して」

「わかったわ、キュア」

スターは起き上がると、倒れているピーターの傍へ寄って、回復魔法である毒や麻痺を治すキュアをピーターにかけてが、ピーターの毒は消えなかった。

「ううっ」

ピーターは苦しんでいる。

「ピーター」

「ダメだわ、毒が強すぎて、キュアが効かない」

「ええっ」

スターの回復魔法が効かないと、ピーターの毒を消す手立てはないと思ったミナキはこのままではピーターが死んでしまうと危機感を感じた。

ミナキは起き上がると、お願い、ピーターを解毒してと願い、幻獣界の幻獣を呼ぶ召喚魔法を初めて使った。幻獣界から幻獣が人間界に呼び出された。額に角が生えた栗鼠、リスである。だが、ミナキはリスのことを知らなかったので、リスを見て驚いた。

「額に角が生えたりス、人間界にはいないわ。ミナキが異世界から呼び出したのね」

スターはミナキが魔法を使って、リスを呼び出したことに驚いた。

リスは倒れているピーターの胸に飛び乗り、角をピーターの顔に向けた。

「ダメ」

リスがピーターに攻撃すると思ったスターがリスを「しっしっ」と手で追い払おうとすると、ミナキがスターの手を掴んで、

「追い払わないで」

と止めた。

「ミナキ、大丈夫なの？」

「大丈夫よ、敵ではないから」

ミナキが敵を呼び出すわけがないと思ったスターはミナキの言うことを信じた。

「ピーターを解毒しようとしているわ」

「え」

「私にはわかるわ、ほら、見て」

「う、うん」

ミナキとスターがリスを見た瞬間、リスの角が光を放った。

「これは」



「ピーター」

ピーターの顔色が良くなっていく。

「苦しくないぞ」

ピーターは起き上がった。

「ピーター」

「毒が消えたようだ」

「良かった」

リスの角は解毒する効果がある。ピーターはリスによって解毒され、元気になった。

「ピーター、このリスが解毒したのよ」

スターがピーターの肩に乗っているリスを指差して言うと、

「え、こいつが」

ピーターがリスのほうを向いて言った。

「そう、ミナキが呼び出したのよ」

スターがミナキのほうを向いて言うと、

「え、ミナキが」

ピーターがミナキのほうを向いて言った。

「うん」

「私の回復魔法では毒が強すぎて効かなかったの、ミナキがこのリスを呼び出して良かったわ」

「そうだったのか、ありがとう、ミナキ、リス」

「ピーターの毒が消えて良かったわ」

ピーターの肩に乗っているリスが尻尾を振った。ピーターの毒が消えて嬉しそうだ。

「ピーターを解毒してくれて、ありがとう」

ミナキがリスに礼を言うと、リスはピーターの肩からミナキの頭に飛び移った。

「グルルル」

リスがアスピスを見て怒った。

「そうだ、アスピスがいたんだったね」

ピーターの毒が消えて喜んでいて、アスピスの存在を忘れていたミナキはリスによって気づかされた。

「スター、ピーター、アスピスを倒そう」

「そうね」

「ああ」

ミナキ、リス、スター、ピーターはアスピスを攻撃したが、アスピスはミナキ、リス、スター、ピーターの攻撃をすばやくかわした。

「くっ」

「きゃ」

ミナキ、リス、スター、ピーターはアスピスの攻撃を受けた。

「毒を受けたって、リスがいるから大丈夫さ」

「うん」

ミナキ、スター、ピーターは毒を受けたら、リスに解毒してもらおうようにしている。

アスピスとミナキ、リス、スター、ピーターは攻撃を互いに繰り返した。

ミナキ、スター、ピーターはアスピスに苦戦してしまい、このままではいけないと感じていた。

「アスピスを倒さないと、葉草を摘むことができない」

「そうね、絶対に倒さないと、ミナキのお母さまのためにも」

「ありがとう、スター」

「俺もスターと同じ気持ちさ」

「ありがとう、ピーター」

アスピスはとぐろを巻いて、ミナキ、スター、ピーターからの攻撃に備え、防御姿勢をとっている。

この間に考えることが得意なミナキはアスピスをどのように攻撃すれば倒せるかを考えて、

「ピーターの森魔法でアスピスの動きを封じてから私の攻撃魔法とスターの剣で攻撃するのはど

うかしら」

とピーターとスターに言った。

「良い考えだ」

「そうね」

ピーターとスターはミナキの考えに賛成した。

「ピーター、森魔法でアスピスの動きを封じて」

「ああ」

ピーターは森魔法を使って、木の枝を操り、アスピスの体を縛った。縛られたアスピスは枝を断ち切ろうともがいていたが、アスピスを縛っている木の枝は丈夫で折れなかった。アスピスの動きを封じた。

「よし、スター、一緒に攻撃よ」

「うん」

ミナキはウォーターでアスピスを攻撃した。アスピスがまともに受けてしまうと、スターは剣を構えて。

「斬る」

と言って、アスピスに向かって剣を振り下ろした。

アスピスの体がスターの剣によって真っ二つになった。ピーターの森魔法が解けて、アスピス

の体を縛っていた木の枝は真つ二つになったアスピスの体を放した。

「やったわ」

「やっと倒したな」

「うん」

ミナキ、スター、ピーターは苦戦の末、アスピスを倒した。ミナキ、スター、ピーターはアスピスを倒せたことに喜び、リスは嬉しそうに尻尾を振った。

「リス、アスピスの毒を解毒してくれて、ありがとう」

アスピスの毒は猛毒でスターの回復魔法、キュアでは強すぎて効かなかった。リスがいなければ、毒を受けた者は今頃死んでいたに違いない。ミナキはリスに礼を言った。

リスはミナキに幻獣界から召喚されたことよって、ミナキを主人と思ったのか、ミナキになつくようになった。

「リス、これからも宜しくね」

ミナキは肩に乗るリスの頭を撫でながら言った。こうしてリスはミナキと一緒に行動するようになった。

「薬草だ」

ピーターが薬草を指差して言った。

薬草がある場所には薬草がたくさん生えている。モンスターが出現して危険な場所なので、薬

草を摘みに来る人はめったに來ない。

「さあ、モンスターがまた出現しないうちに、薬草を摘もう」

「うん」

「そうだな」

「たくさん摘もうね、またここに来ることがないように。モンスターが出現して危険な場所だからね」

「うん」

「そうだな」

ミナキはスターとピーターとありったけの薬草を摘んで、袋の中に入れた。これだけあればもうここに来なくていいだろう。

「ミナキのお母さんの傷、完治するといいな」

「うん、ありがとう、ピーター」

「私の回復魔法と併用すれば、ミナキのお母さまの傷、完治するわよ」

「そうだね、ありがとう、スター」

「さあ、帰ろう」

「うん」

「ああ」

ミナキ、スター、ピーターは薬草がある場所から立ち去った。

しばらく歩いていると、アスピスを倒してから薬草を摘むまでの間、我慢していたアスピスとの戦いでついた傷の痛みが我慢できないほど酷くなった。歩けなくなり、座り込んでしまった。

「痛くてもう歩けないわ」

「うう、俺も」

「う、私も。薬草で傷を治そう」

ミナキが袋の中に入れた薬草を取り出そうとすると、

「ダメよ、ミナキのお母さまの重い傷を治すために必要なのだから」

スターが止めた。

「でも、スター、アスピスとの戦いで魔法力を使ったからヒールが使えないでしょう」

「大丈夫、魔法力は空っぽではないわ。温存していたからね」

とは言っても、ヒールが一回使える程度の魔法力しか残っていないなかった。魔法は全体に使うと、単体に使った時より効果は下がる。

「ヒール」

スターはヒールを全体に使った。ミナキ、スター、リス、ピーターのアスピスとの戦いでついた傷が回復した。

ミナキはスターを見ると、

「ありがとう、スター」

と言った。

リスがミナキの頭からスターの肩に飛び移って、尻尾を振った。アスピスとの戦いでついた傷を治してもらって、嬉しそうだった。

「リス、ピーターのアスピスから受けた毒を解毒しようとしていた時に、ピーターから追い払おうとして、ごめんね」

スターがリスに謝ると、リスは怒っていないと言わんばかりに、スターの顔をペロツと舐めた。

「リス、ふふ」

ピーターがスターを見ると、

「ありがとうな、スター」

と言った。

「スターのおかげで傷の痛みがちよっとおさまったわ」

「そうだな。これなら歩けるぜ」

「良かったわ、魔法力がもう残っていないから」

「さあ、帰ろう」

リスがスターの肩からミナキの頭に飛び移ると、ミナキはスター、ピーターと歩き出した。しばらく歩いていると、疲れてきた。ミナキはスターとピーターを見ると、

「ねえ、休憩しない」

と言った。

スターとピーターも同じだったらしく、ミナキを見ると、

「休憩しよう」

「休憩しようぜ」

と言った。

ミナキ、スター、ピーターは疲れたので休憩した。

「ふう」

「疲れたね」

「でも、ミナキのために薬草が摘めて良かったよ」

「そうね」

「ピーター、スター、ありがとう」

「おめえひとりでは無理だったからな。同行して良かったぜ」

「あなたひとりで行かせていたら、心配でたまらなかったわ。同行して良かったわ」

スターはミナキより二歳年上、ピーターはミナキより一歳年上なので、ミナキを妹のように接することから、スターはミナキにとって姉のような存在、ピーターはミナキにとって兄のような存在であった。

「ミナキ、スター、俺、世界の森を巡る旅に出ようと思う」

「世界の森を巡る旅？」

「ああ。強くなるために森魔法の修行をしようと思ってる」

「そう」

「世界に点在する森の力を利用して、森魔法を使ったらすげえだろうな」

「そうね。ピーター、強くなるよ」

「世界に点在する森と友達になれたらいいな」

「いいね」

「だから俺、ここリディアの森から旅立つよ」

「ピーター、しばらくの間いなくなるのね」

「ああ」

「ピーターとここリディアの森で一緒に遊べなくなるのね」

「ミナキはリディアの森に遊びに来て、良き遊び相手であるピーターがいなくなるとつまらないと思っただけ」

「ここリディアの森にいつ帰ってくるかはわからないけど、帰って来たらミナキ、一緒に遊ぼうな」

いつかピーターとここリディアの森で一緒に遊べる日がくるのならミナキは笑って、

「うん」

と言った。

「じゃあな、また会おうぜ」

ピーターはミナキとスターに手を振って走り去った。

「またね、ピーター」

ミナキとスターはピーターと別れた。

「ピーター、行ってしまったね」

「うん。ピーターがいなくなって、寂しいよ」

「ミナキ、ピーターはこりディアの森に必ず帰ってくるよ」

「そうだね。こりディアの森はピーターが住む森だからね」

ミナキはピーターが必ずここに帰ってくることを信じて待つことにした。

「スター、帰ろう」

「うん」

ミナキはスターとリディアの村の家に帰った。

「ただいま！ お父さま、お母さま」

「ただいま！ ミナキのお父さまとお母さま」

ミナキが扉を開けて、スターとリディアの村の家の中へと入ると、ガザはベッドに横たわっているゴルティナの傍にある座っていた椅子から立ち上がり、

「お帰り！ ミナキ、スター」

と言つて、ミナキとスターに駆け寄つた。

「お帰りにさい！ ミナキ、スター」

ベッドに横たわっているゴルティナがミナキとスターに笑顔で言つた。

「ん、このリスは？」

ガザがミナキの頭に乗っているリスについて尋ねると、

「魔法を使つたら、姿を現したの」

とミナキは言つた。

「何だつて！」

ガザが驚いたように叫んだ。

「モンスターではないようだな」

とガザがリスを見て言うと、

「幻獣よ」

とゴルティナが言つた。

「幻獣？」

「ミナキが幻獣界の幻獣を呼ぶ召喚魔法を使ったから、リスが幻獣界から呼び出されたのよ」

「お母さま、私が召喚魔法を使ったから、リスが姿を現したの？」

「そうよ」

「そうだったのね」

「リスは幻獣界の幻獣なの。額の角は解毒する効果を持っているわ」

「だから、毒を受けた私たちを解毒することができたのね」

「おまえたち、毒を受けたのか」

「うん。モンスターのアスピスに襲われてね」

「何！ アスピスとは猛毒の蛇のモンスターではないか。苦戦したのではないか」

「うん。でも、リスがいたから苦戦の末倒せたよ」

「そうだったのか。リスがいなければ、おまえたちは今頃どうなっていたか。とにかく無事で良かったよ」

ガザがミナキの頭に乗っているリスを見ると、

「ミナキたちを助けてくれて、ありがとうな」

と言って、リスの頭を撫でた。

リスがミナキの頭からガザの肩に飛び移って、尻尾を振った。ガザに頭を撫でもらって嬉し

そうだ。

ミナキが幻獣界の幻獣を呼ぶ召喚魔法を使って、幻獣であるリスを幻獣界から呼び出したからには、ガザ、ミナキ、スターに今まで隠していた自分が幻獣界の幻獣であることを長く隠すことはできないと思ったゴルティナは自分が幻獣界の幻獣であること、ミナキが幻獣界の幻獣と人間の人間の混血児であることを明かした。

「何だつて！ ゴルティナが幻獣界の幻獣」

ガザはゴルティナが人間界の人間ではないことはわかっていたが、幻獣界の幻獣とは知らなかったの、驚いた。

「ええ？ ミナキのお母さまは人間界の人間ではなかったのね」

スターはゴルティナが人間界の人間だと思っていて、幻獣界の幻獣とは知らなかったの、驚いた。

「えっ？ 私は幻獣界の幻獣と人間界の人間の混血児だったのね」

人間界で生まれたミナキは自分が幻獣界の幻獣の血を引いているとは思っていなかったの、驚いた。

リスがゴルティナを見て、ガザの肩からゴルティナの枕元に飛び移って、尻尾を振った。ゴルティナが幻獣界からいなくなっって心配していたので、ミナキに人間界に呼び出されたことで、ゴルティナと再会して、安心して、嬉しそうだった。

「リス、人間界の人間の危機を救ってくれて、ありがとう。人間界の人間は私の命を助けてくれたからね」

ゴルティナがリスの頭を撫でながら言った。

「ゴルティナ、おまえが人間界の人間ではなく、幻獣界の幻獣だろうと、おまえは私の大切な家族だ」

「ガザ」

「ミナキ、おまえもだ。幻獣界の幻獣と人間界の人間の混血児であろうとな」

「お父さま」

幻獣界の幻獣は人間界の人間を嫌っていたが、人間界の人間であるガザが人間界に迷い込んだ幻獣界の幻獣であるゴルティナを保護したことによって、人獣界の人間と幻獣界の幻獣との絆を深めた。

「ガザ、これからも宜しくね」

「ああ。こちらこそ。人間界の人間と幻獣界の幻獣、仲良くしよう」

「ええ」

「人間界の人間と幻獣界の幻獣が仲良くするといいな」

「そうね。幻獣界の幻獣と人間界の人間の混血児であるミナキにとってはいいことだからね」

「スター」

「ミナキ、仲良くしようね」

「うん」

「ミナキ、薬草を摘んできたか」

「うん。これよ」

ミナキはベストの中の薬草を入れた袋を出して、ガザに渡した。ガザは袋を開けると、袋にくさん入っている薬草を見て、

「おお！ これだけあれば十分だ！」

と言った。

「薬草をありったけ摘んできたよ」

「そうか！」

ガザは薬草をすってペースト状にしたのをゴルティナの傷に塗った。

「スター、回復魔法を頼む」

スターはヒールをゴルティナに使った。今までゴルティナの傷の治りが遅かったのが、薬草をすってペースト状にしたのを塗ったので、早くなった。

「ガザ、スター、ありがとう」

「よし！」

ガザは薬草とスターの回復魔法と併用して、ゴルティナの傷の治療をすることにした。

ガザが薬草とスターの回復魔法と併用して、ゴルティナの傷の治療をしてから数日が経過した。ゴルティナの傷はきれいに完治した。

「全快したわ」

「ゴルティナはベッドから起き上がった。」

「全快して良かった」

「お母さまが元気になって良かったわ」

「ミナキのお母さま、傷が治って良かったわ」

ガザ、ミナキ、スターは心から喜んだ。

「ガザ、スター、ありがとう。本当に感謝しているわ」

「ゴルティナ」

「ミナキのお母さま」

ゴルティナは重傷を負ってしまい、どうなることかと思っただけで、ここまで全快して良かった。これも、ずっと治療してくれたガザとスターのおかげだと思った。

「スター、ありがとう。おまえの回復魔法がなければ、薬草だけではゴルティナの傷の治療はで

きなかつただろう。本当に感謝している」

ガザがスターに礼を言った。

「ミナキのお父さま」

「スターがいなかったら、お母さまの傷は治らなかつたと思う。ありがとう」

ミナキがスターに礼を言った。

「ミナキ」

(そうだ、ピーターにも礼を言わないと、リディアの森の薬草を摘みに同行してくれたから) ミナキはピーターが世界の森を巡る旅から帰って来たら、ピーターに礼を言おうと思った。リスはゴルティナが全快してとても嬉しそうにリディアの村の家の中を走り回っていた。

全快したゴルティナはガザとミナキとともに平穏な暮らしをしていた。

「ガザ、私、外に出たいわ」

ゴルティナは全快するまで外に出ることができなかつたので、外の空気が吸いたかつた。

「ゴルティナ、一緒に散歩しようか」

「ええ」

「よし！ リディアの森を散歩しよう」

「ええ」

「お父さま、お母さま、私とリスも一緒に良いかしら」

「もちろんだ」

「みんなで散歩しましょう」

ガザ、ゴルティナ、ミナキ、ミナキの頭に乗っているリスがリディアの村の家を出ると、屋根からトリルが飛んで来た。トリルはガザとリディアの森をよく散歩していたので、散歩への同行を求めていた。

「おいで、トリル」

ガザが腕を差し出すと、トリルはガザの腕に止まった。

「ミナキ、トリルと先に行きなさい。私はゴルティナと後から行く」

「わかったわ」

「トリル、行こう」

ミナキは飛んで行ったトリルの後を追うようにリディアの森のほうへと走って行った。

ゴルティナは外の空気を吸って、

「気持ち良いわ」

と言った。ガザは外の空気を吸って気持ちよさそうなゴルティナを見て重傷だったゴルティナが全快して外の空気を吸えて良かったと思った。

「ここがリディアの森だ」

「ガザの住むリディアの村の家は森に囲まれているのね」

「そうだ」

「素敵ね」

「さあ、行こう」

「ええ」

ガザとゴルティナはリディアの森へ歩いて行った。

ミナキはリディアの森を歩いていた。

リスはミナキの頭から地面に飛び降りると、落ちている実を食べたり、飛んでいる虫を追いかけた。たりして、楽しそうにしていた。

トリルはリディアの森を飛び回っていた。

「ピーター」

ミナキはピーターがいないことに寂しさを感じた。

「ミナキ」

ミナキの後からガザとゴルティナがやって来た。

「あ、お父さま、お母さま」

「トリルは」

「あそこよ」

ミナキは飛び回っているトリルを指差して言った。ガザは飛び回っているトリルを見ると、「おお、元気に飛び回っているな」

と言った。

「トリルはリディアの村の家に来るまで、ここリディアの森に住んでいたのよね」

「そうだ」

「きれいな」

ゴルティナはリディアの森のたくさんの美しい木々や草花を見て言った。幻獣界にはないもので、人間界は素晴らしい世界だと思った。

ガザ、ゴルティナ、ミナキが親子揃って歩いていると、トリルがリスを背中に乗せて飛んできた。

「トリルとリスが」

「どうやら互いに気に入ったようだな」

「ふふ」

ガザ、ゴルティナ、ミナキはトリルとリスが仲良くしているのを見て言った。

「さあ、散歩しようか」

ガザ、ゴルティナ、ミナキ、リス、トリルはリディアの森を散歩した。



「ここリディアの森を散歩すると、木々の香りが体に満ちて、何だか心が落ち着いてくる気がするわ」

「そうだな」

「いい散歩道ね」

「ああ。おまえと出会い、ミナキが生まれるまでここリディアの森でよく散歩していたのだ。ここリディアの森はいい散歩道だよ」

ゴルティナはガザと肩を並べて歩きながら話し合った。

トリルとリスは互いに良い遊び相手になり、じゃれあったりして遊んでいる。

「今、ピーターはどこで何をしているのかな？」

ミナキは木の枝にかけた花輪を見て、世界の森を巡る旅に出た。ピーターのことが気になった。木の枝にかけた花輪はピーターと草花遊びをした時に一緒に作ったものである。

「そろそろリディアの村の家に帰ろうか」

「ええ」

「おいで、トリル」

ガザが腕を差し出すと、トリルはガザの腕に止まった。リスはトリルの背中から地面に飛び降り、ミナキの頭に乗った。

「これからもガザ、ミナキとここリディアの森で散歩したいわ」

「そうだな」

「うん」

「さあ、リディアの村の家に帰ろう」

ガザ、ゴルティナ、ミナキはリディアの村の家に帰って行った。

翌日、ガザは幻獣界の幻獣であるゴルティナがどうして重傷を負って、人間界で倒れていたのか疑問に思っていたことをゴルティナに訊ねるため、ゴルティナとふたりきりで話がしたいと思った。ミナキがリディアの村の中でリスと遊んでいるので、

「ミナキ、外でリスと遊びなさい」

と言った。

「わかったわ」

ミナキはどうして？ と理由を聞くことなく、リスと外に出た。

「リス、リディアの森で一緒に遊ぼう」

リスがミナキの頭に乗ると、屋根に止まっていたトリルが飛んで来た。ミナキとリスと一緒にリディアの森で遊びたいようだ。

「トリル、ついておいで」

「ミナキがリディアの森に向かって走り出すと、トリルは後を追うように飛んで行った。

「よし」

ガザはミナキの姿が見えなくなったことを確認すると、ゴルティナを見つめた。

「私とミナキに聞かれてはいけない話をしたいようね」

ゴルティナはガザの訊ねたい気持ちを感じて言った。

「ああ。おまえがどうして重傷を負って、人間界で倒れていたのかを訊ねたい」

やはりと思ったゴルティナはガザに隠していても仕方がないと思い、

「答えるわ」

と言った。

「ミナキに聞かれてはいけないだろう」

「そうね、まだ幼いからね。ミナキが成長したら話を聞いてもらおうと思っているわ」

「そうか」

ゴルティナはしばらくしてから話し始めた。

「幻獣界で私は魔王サタンの子ベリアルに我が子を拉致されて、取り戻そうとしたら、重傷を負わされ、異世界に飛ばされてしまったの」

ガザはゴルティナにミナキが生まれる前に子がいたことを知った。

「そうか、父親の違う子がいたのか」

「ええ。私は幻獣界の王妃なの。だから」

「そうだったのか。おまえが幻獣界の王妃でありながら、人間界の人間である私を愛し、人間界の人間と幻獣界の幻獣の混血児であるミナキを産んで良かったのか」

「わからないわ。でも、生きているのか死んでいるのかさえ、わからないミナキが生まれる前に産んだ子の代わりと思えば」

「そうか」

しばらく黙った後で、ガザがゴルティナから聞いた魔界の魔王サタンの子ベリアルのことについて話し始めた。

「その昔、人間界と魔界が争った」

「その昔に人間界と魔界の戦争があったのね」

「そうだ」

「どうなったの」

「人間界の聖女ナワクラティスが魔界の魔王ベルゼブルを倒し、人間界が勝った」

「では、魔王サタンは」

「恐らく魔王ベルゼブルの子孫であるということだ。どうしてベリアルは幻獣界に来たのか」

「ベリアルは魔界から人間界の人間と戦うために幻獣界の幻獣の力を貸して欲しいと言って、幻獣界にやってきたわ」

「何！」

「人間界の人間と戦うつもりはなかったから断ったの。ベリアルが私から我が子を奪い、幻獣界から立ち去ろうとした時、私はベリアルから我が子を取り戻そうとしたけど」

「ベリアルに重傷を負わされ、異世界に跳ばされてしまったのか」

「ええ」

「何ということだ」

ガザは何年か先人間界と魔界がまた争うことになるだろうと予感した。

「ミナキ」

ミナキがリス、トリルとリディアの森で遊んでいると、スターがリディアの森にやってきた。

「スター」

「ミナキと遊ぼうと思ってリディアの村に行ったらいなかったから、リディアの森行ったらいるかなと思って」

「そうか」

「ミナキ、遊ぼう」

「うん」

スターに遊ぼうと誘われたミナキはスターと遊んだ。

「スター、草花遊びをしよう」

「いいわね」

ミナキとスターは草花を摘んだ。

「ピーターと一緒に草花を摘んで、花輪を作ったのよ。見て、スター」

ミナキは木の枝にかけたピーターと草花遊びをした時に一緒に作った花輪を指差して言った。

「わあ、きれい」

スターはミナキが木の枝にかけたピーターと草花遊びをした時に一緒に作った花輪を見て言った。

「花の冠を作りたいわ」

「いいわね」

ミナキとスターは摘んだ草花で花の冠を作った。スターは作った花の冠をミナキの頭にかぶせると、

「ミナキ、似合っているわね」

と笑顔で言った。

「ありがとう。スター」

ミナキは作った花の冠をスターの頭にかぶせると、

「スターこそ、似合っているわよ」

と笑顔で言った。

「ありがとう。ミナキ」

花の冠をかぶったミナキとスターは互いに眺め合った。

「ピーター、今どうしているのかな」

「元気になっていると思うよ」

「ピーターがいないと寂しいね」

「そうね」

ミナキとスターは世界の森を巡る旅に出たピーターのことを話した。

「ピーターがいたら、ピーターの頭にかぶせたいね」

「そうね、ピーターも似合うと思うわ」

ミナキはピーターが世界の森を巡る旅からリディアの森に帰ったら、花の冠をピーターの頭にかぶせたいと思ひ、ピーターの分も作った。

「どう？ ピーター、緑が好きだって言っていたから花より草を多めにしたわ」

「いいわね、ピーター、喜ぶと思うよ」

ミナキはピーターの花の冠を自分の頭にかぶせた。

「ピーターに会える日まで大切に持っておくわ」

「うん」

ミナキとスターはリディアの森を歩いた。一面に緑が覆い、木々や土が薫り、森に息づく命や力を感じることに、癒しを感じた。

「ここリディアの森を歩いていると、癒されるわね」

「うん」

「疲れたら、ここに来たいわ」

「ここに一緒に来よう」

「うん」

ミナキとスターが立ち止まって周りを見渡すと、トリルとリスが遊んでいた。

「ミナキ、リスと遊んでいる鳥は？」

「トリル、お父さまの鳥なの」

「ミナキのお父さまの鳥？」

「うん」

「そう」

「普段はリディアの村の家の屋根に止まっているの」

「へえ」

スターはガザに呼ばれて、リディアの村の家に来ているが、トリルをあまり知らなかった。

「リスとトリル、仲がいいのね」

「うん」

トリルとリスは遊び終わった後にグルーミングをしていた。

「ミナキ、私、ウルに帰るね」

「うん。私もそろそろリディアの村に帰るわ」

「またね」

「うん」

ミナキはスターと別れた。

「トリル、リス、リディアの村に帰るよ」

ミナキがリディアの村の家に向かって走り出すと、トリルはリスを背中に乗せて後を追うように飛んで行った。

ミナキがリディアの村の家に帰ると、ガザとゴルティナはとふたりきりで話をした後だった。ちようどいいタイミングにミナキが帰って来て良かったと思い、

「おかえり、ミナキ」

と笑顔で言った。

(パトモス、今どうしているのかしら)

ゴルティナは幻獣界の王であるパトモスのことが気になった。ゴルティナが幻獣界から人間界に来てミナキが生まれてから九年が経過している。パトモスは幻獣界にひとりである。ゴルティナのことを心配しているだろう。

ゴルティナが窓際に置かれたベッドの上に足を崩して座っていると、窓からガザとミナキ、トリルとリスが外で遊んでいるのが見える。

(私はこのまま人間界にいていいのだろうか)

ゴルティナは幻獣界に戻ることになると、人間界で生まれて育ったミナキはどうすればいいのか、このまま人間界にいと、幻獣界はパトモスはどうなるのかと悩んだ。

「ただいま」

ガザが帰って来た。

「おかえり。ミナキは」

「リス、トリルと外で遊んでいるよ」

「そう」

「どうした？ 元気がないね。悩みがあるなら私が聞いてあげるよ」

「ガザは悩みを抱えて元気がないゴルティナを見て言った。

「ガザ」

「悩みを抱えていたら、私に相談しなさい」

「……」

しばらく黙っていたゴルティナが口を開いた。

「ガザ、私はこのまま人間界にいるべきか？ 幻獣界に戻るべきか？」

「うん」

ガザはしばらく考えて、ゴルティナの質問に答えた。

「ミナキのことを考えれば、おまえはこのまま人間界にいるべきだ」

「私はこのまま人間界にいるべきね」

「ミナキは人間界で生まれて育っている。もし、おまえがミナキを連れて幻獣界に戻ることにすると、ミナキはどう思うか」

「幻獣界より人間界のほうがいいと思うわね」

ゴルティナはこのまま人間界にいくべきであるとはいえ、ガザは複雑な心境だった。ゴルティナが幻獣界の王妃なら王のためにも幻獣界に戻る必要がある。一方で、ゴルティナが幻獣界に戻ると、ミナキはどうなるのか。ミナキのことを考えると、ゴルティナはこのまま人間界にいくべ

きではないかという気持ちもある。

ゴルティナは人間界で生まれて育っているミナキのことを考えて、

「ガザ、私、このまま人間界にいるわ」

と言った。

「そうか」

「ええ」

しばらくして、ミナキが帰って来た。リスがミナキの頭に乗っている。

「おかえり、ミナキ」

「ただいま、お父さま、お母さま」

ミナキは帰ってきてからすぐベッドに寝転んだ。遊び疲れたのか寝入ってしまった。リスは枕元で丸くなって寝ている。

寝ているミナキに布団をかけたゴルティナはミナキの寝顔を見て、私はミナキのためにもここにいなければならないと思った。

「ゴルティナ」

ガザがゴルティナの肩に手を置いた。

「ガザ」

「おまえが幻獣界に戻ると、ミナキはおまえと離れ離れになってしまう。ミナキのためにもここ

に私といて欲しい」

「そうね。わかったわ」

「ゴルティナ」

ガザはゴルティナの肩に置いた手を引いた。

ゴルティナは人間界にいと、パトモスにはないガザの優しさに包まれて幸せだった。このま
ま人間界にいられたらと思つた。

(幻獣界の王妃であることは忘れよう。私はガザと一緒にいたい)

ゴルティナはガザを見つめると、

「ガザ、私はあなたと一緒にいたい」

と、ガザに寄り添つた。

「ゴルティナ」

ガザはゴルティナの肩を抱いた。

夜になり、外が暗くなつた。ガザは寝ているミナキを見て、

「私たちもそろそろ寝るか」

と言つた。

「ええ」

ゴルティナがベッドに横たわつてミナキと寝ると、ガザはミナキとゴルティナが寝ているベッ

ドの横に布団を敷いて寝た。

ガザはベッドで寝ていたが、ゴルティナと出会い、ミナキが生まれてからずっと、ゴルティナとミナキをベッドに寝かせ、自分はずぐ横に布団を敷いて寝るようにしている。

ゴルティナは夢を見た。幻獣界にひとりでいる。パトモスの夢だった。

パトモスの前に、ベリアルが突然現れた。

「おのれ、ベリアル。よくもゴルティナと我が子を」

パトモスはベリアルに対する憎しみを募らせた。

「ベリアル、ゴルティナをどうした」

「さあな」

「きさま」

「幻獣界の女王はもうここに戻ることはない」

「何だと」

「人間界の人間と戦うために力を貸せば、おまえと幻獣界の女王の子を返してやる」

「言ったはずだ、我々は人間界の人間と戦うつもりはない。魔界の魔族に力を貸す気はないと」

「そうか」

「ゴルティナの敵だ」

パトモスはベリアルに攻撃をしかけたが、ベリアルは軽々とパトモスの攻撃をかわした。

「くっ」

「どうした。これが幻獣界の王の力か。たいしたことはないな」

「何だと」

「この程度の方では私は倒せない。見せてやろう。私の力を」

ベリアルは。パトモスを睨んだ。

「うっ」

パトモスは動きを封じられてしまった。

「何という力だ。か、体が動かない」

ベリアルは。パトモスの前まで歩を進めると、パトモスに魔力を腕に纏わせ剣の形にする魔力の剣を向けた。

「幻獣界の女王の後を追うが良い」

ベリアルは魔力の剣でパトモスを激しく斬り付けた。

「パトモス」

ゴルティナはパトモスがベリアルに血まみれになって殺されたところで、目が覚めた。

「夢か」

夢から覚めたゴルティナが布団から半身を起こして周囲を見ると、ガザとミナキは眠っていた。
(ガザ、ミナキ)

パトモスがベリアルに殺された夢を見たことでパトモスに何かあれば、幻獣界はどうなるのか。私は幻獣界の王妃。パトモスには私がいなければならない、幻獣界に戻らなくてはならない、とゴルティナは思った。

窓の外はまだ暗い。

(ガザが起きたら、幻獣界に戻ることを話そう。ミナキをどうするか決めなければ)
ゴルティナはベッドに横になり、朝まで寝た。

朝になり、ゴルティナは目が覚めた。ベッドから起き上がると、ガザが起きていて、布団を畳んでいた。

「ガザ、起きていたのね」

「ああ。ゴルティナ、目が覚めたようだな」

「ええ」

ゴルティナがガザに寝ているミナキを見て、

「ミナキ、よく寝ているわね」

と言うと、ガザは寝ているミナキを起こすのはかわいそうだと思い、

「起こさずにそのまま寝かせておこう」

と言った。

「ええ」

ゴルティナはミナキが起きる前にガザにパトモスがベリアルに殺された夢を見たことで幻獣界に戻ることを決意したことを話そうと思った。

「ガザ、私は幻獣界の女王。いつまでも人間界にいられない」

「このまま人間界にいてと言っていたではないか。どうしたのだ」

「幻獣界の王がベリアルに殺された夢を見たの」

「何」

「だから、私、幻獣界の王が心配で」

「そうか」

ゴルティナは幻獣界の王妃である。ゴルティナがこのまま人間界にいて、幻獣界にとってよくない。ガザはしばらく考えてから、

「ゴルティナ、別れよう」

と言った。

「ガザ」

「私は人間界の人間だ。幻獣界に行くことはできない。それにおまえには王がいる。おまえと一緒にいることはできないからな」

「そうね」

「ミナキをどうするか」

人間界と魔界が争う時がいつか来る。この時が来たら幻獣界も魔界と争うことになるだろう。パトモスとの子がベリアルに拉致されてしまった以上、王妃の後継者がいなくなってしまうので、幻獣界の将来のためにもミナキは幻獣界に連れて行かなければならない、とゴルティナは思った。

「ミナキを連れて人間界から幻獣界に移住するわ。人間界と一緒に魔界と戦うために。そのためにはミナキを幻獣界で幻獣界の王と強い子に育てないといけない。幻獣界の将来のためにもミナキには王妃の後継者になってもらわないと」

「そうか。わかった」

「ガザ、一緒にいられなくて、ごめんなさい」

「謝ることはないよ。おまえは幻獣界の王妃だから。幻獣界のことを考えるのは当然のことだ」

「ガザ」

ゴルティナとガザが別れることで、ミナキをどうするか相談したあとしばらくしてから寝ていたミナキが目を覚ました。寝ていたリスが起きて、ミナキの頭に乗った。

「ミナキ、起きたか。よく寝ていたな」

「うん。よく寝たわ、ねえ、リス」

リスは睡眠時間たっぷりの後の寝起きで機嫌が良かった。

「ガザ、ミナキに話すわ」

「ああ」

ゴルティナはガザと別れて、ミナキと一緒に人間界から幻獣界に移住することをミナキに話した。

「え？ お母さま、お父さまと別れて、私と一緒に人間界から幻獣界に移住するの？」

「そうよ」

「嫌よ！ 私、人間界にいたいわ！ お父さま、スターと離れたくない！」

「ミナキ、ゴルティナと一緒に人間界から幻獣界に移住しなさい！」

「お父さま」

「私とゴルティナが決めたことだ。幻獣界のためにゴルティナはもう人間界にいられない。ゴルティナのためにもおまえは幻獣界の幻獣の血を引いているのだからゴルティナと一緒に人間界から幻獣界に移住しなければならない」

「そんな……」

ミナキは両手で顔を覆いながら、泣いた。リスが泣いているミナキを慰めるようにミナキの頭から肩に飛び降りて、顔を覆っている手を舐めている。

「泣くな、ミナキ。離れていても私とおまえは親子だ。私はおまえを忘れることはない。おまえ

が大きくなったら、人間界に戻ることができる」

パトモスは泣いているミナキの肩に手を置いた。

「本当に？」

「ええ、本当に。人間界はあなたの生まれ故郷だからね。だから泣かないで」

ゴルティナは泣いているミナキの背中をさすった。

「わかったわ」

ミナキは手をおろし、泣き止んだ。ガザはミナキの肩に置いた手を引き、ゴルティナはミナキの背中をさするのをやめた。

「ゴルティナ、いつ、移住する？」

「明日、移住するわ」

「そうか」

「お母さま、移住する前にスターに言わないと。黙って移住するわけにはいかないわ」

「そうね。移住する前にスターのところへ行ってきたさい」

「うん」

ミナキがスターに会いにウルへ向かい、ウルに足を踏み入れると、ミナキに気づいて、スターが近寄って来た。

「ミナキ」

「スター、私、お母さまと一緒に人間界から幻獣界に移住することになったの」

「ええっ」

「だから、会えなくなっちゃうわ」

「ミナキに会えなくなるのは嫌」

スターはミナキと離れるのが嫌だった。

「私もスターに会えなくなるのは嫌よ」

ミナキもスターと離れるのが嫌だった。

「だけど、お父さまとお母さまが決めたことだから」

「そう。仕方ないわね。親の言うことは聞かないといけないからね」

「うん」

「いつ、移住するの？」

「明日よ」

「そう。明日、ミナキのお母さまとミナキを見送るためにリディアの村の家に行くわ」

「うん」

「ミナキ、私のこと忘れないでね」

「スターこそ」

「もちろんよ」

「人間界に戻ってくる？」

「うん。大きくなったらね」

「大きくなったら、また会えるのね」

「うん」

「良かった。ずっと会えないわけではないから」

「うん」

リスがミナキの頭からスターの肩に飛び移って、スターの顔を舐めた。

「リス、ミナキと一緒に来てくれたのね。嬉しいわ」

スターはリスの頭を撫でた。

「スター、私、そろそろ帰るね。また明日」

「うん」

リスがスターの肩からミナキの肩に飛び移って頭に乗ると、ミナキはリディアの村の家に帰った。

翌日、人間界から幻獣界に移住するゴルティナ、ミナキ、リスをガザ、トリルと見送るため、スターがリディアの村の家にやって来た。

「ミナキ、元気でね」

「うん。スターも元気でね」

ミナキとスターは互いに手を取り合った。

「ゴルティナ、元気でな」

「ええ。ガザも元気でね。今までありがとう」

ゴルティナはガザに抱きついて、すぐ離れた。

しばらくしてからゴルティナは、

「ミナキ、ガザとスターとお別れよ」

と言った。

ゴルティナとミナキはガザとスターに別れを告げると、背中を向けて歩いてから振り向いて、ガザとスターを見た。

ガザは悲しいけどミナキたちを引き留めないために寂しげな微笑？ という感じの複雑な表情で手を振った。

「ミナキ、大きくなったら、また会おうね」

スターは大きな声をあげ、涙を流しながら全力で手を振った。

ゴルティナは静かに涙を流し、ミナキは涙を流しながら全力で手を振った。

ミナキの頭に乗っているリスは飛んでいるトリルを見つめていた。



幻獣界に到着したゴルティナとミナキは。パトモスがいる城へ向かった。

「お母さま、怖い」

幻獣界は人間界と違って、日があたらないので、いつも暗い。ミナキは幻獣界を怖がり、ゴルティナの腕につかまって震えていた。

「大丈夫よ、怖くないわ」

ゴルティナはミナキを励ました。

「パトモス王はどこにいるの？」

「城にいるわ」

「パトモス王がいる城にまだ着かないの？」

「もうすぐ着くわよ」

しばらく歩くと、パトモスがいる城が見えてきた。

「あれ？」

ミナキがパトモスがいる城を指差して言うと、

「ええ。あれよ」

リスがミナキの頭から飛び降り、パトモスがいる城に向かって、走って行った。

「リス」

「私が幻獣界に戻って来たことをパトモスに伝えるために先に行ったのだから」

「そうか。リスは幻獣界の幻獣だからパトモス王にお母さまが幻獣界に戻って来たことを伝えたかったのね」

「ミナキ、行きましょう」

「うん」

ゴルティナはミナキとリスのあとを追うようにパトモスがいる城へ向かった。

パトモスが居る城に入ったリスは、王室まで一気に辿り着いた。王室にいたパトモスはリスに気づくと、

「おお、リスではないか。幻獣界からいなくなったからどこに行ったのかと思ったよ。戻って来たか」

と言った。

リスはパトモスの肩に乗ると、パトモスにゴルティナが幻獣界に戻ってきたことを言うようにチュツチュツと鳴いた。

「ゴルティナが幻獣界に戻って来たのか」

リスは頷くように首を縦に振った。

「そうか、良かった」

パトモスはベリアルに重傷を負わされ、幻獣界から異世界に飛ばされたゴルティナが幻獣界に戻ってくるとは夢にも思わなかったので、本当に嬉しかった。

パトモスは王室を出て、ゴルティナを迎えに行った。

パトモスがいる城に入ったゴルティナとミナキが王室に向かおうとすると、パトモスが前方からやって来た。

「パトモス」

「ゴルティナ」

パトモスとゴルティナは再会して抱き合った。

「ゴルティナ、戻って来たか。良かった。ベリアルに重傷を負わされ、幻獣界から姿を消されてしまったおまえのことを心配していたから」

「パトモス、心配をかけてごめんなさい」

ミナキが抱き合うパトモスとゴルティナをじっと見ていると、リスがパトモスの肩から飛び降りてミナキに駆け寄り、ミナキの頭に乗った。

パトモスがミナキに視線を向けると、ゴルティナと抱き合うのをやめて、

「ゴルテイナ、この子は？」

と言った。

「ミナキよ」

「ミナキか」

パトモスがミナキに近寄ると、ミナキは近寄るパトモスから離れるように、後退りをした。怖がっているようですらあった。

「ミナキ、大丈夫よ」

ゴルテイナが言うと、ミナキは後退りをやめた。

パトモスはミナキの目の前まで近寄って止まり、ミナキの顔をじっと見下ろし、ミナキはパトモスの顔をじっと見上げた。こうしてパトモスとミナキは互いに顔を向かい合わせた。

「ミナキ」

「パトモス王」

パトモスとミナキが名前を互いに呼び合った。

パトモスがミナキの頭に乗っているリスを見て、

「リス、ミナキになつているのか」

と言うと、リスは頷くように首を縦に振った。

(リスがなつくということはミナキは一体何者なのだ?)

パトモスがミナキを疑問視し、ミナキのことをゴルティナに聞こうとすると、

「パトモス、ゆっくり王室で話しましょう」

とゴルティナが言った。パトモスはミナキのことを話すだろうと思ひ、

「ああ。そうだな」

と言った。

ゴルティナがパトモスと王室に向かおうとすると、ミナキがリスと人間界から幻獣界までの道中疲れて、倒れこむように寝てしまった。

「ミナキ、リス、どうしたのだ」

「人間界から幻獣界までの道中疲れたのよ。寝室に寝かせましょう」

「そうだな」

パトモスとゴルティナはミナキとリスを抱きかかえると、寝室に向かった。

寝室に入ると、ミナキとリスを寝かせ、王室に向かった。

王室に入ると、王座に座った。

「王座に座るのは何年ぶりかしら」

「何年かぶりだな」

「そうね。久しぶりね」

「おまえが幻獣界に戻ってこなかったら、こうして王座にふたり並んで座ることはなかった」

「そうね」

「さあ、ゆっくり話そうか」

「ゴルティナはパトモスに人間界の人間のこと、ミナキのことを話し始めた。

「ベリアルに重傷を負わされて、異世界に飛ばされた私は人間界に倒れていたの」

「人間界にいたのか」

「ええ。人間界の人間が私を見つけてくれて介抱してくれたの。人間界の人間は私にとっても優しくくれたわ。だから私は人間界の人間の優しさに惹かれて……」

「まさか、愛してしまったのか」

「え、ええ」

「で、では、ミナキは」

「人間界の人間と私の子なの」

「人間界の人間と幻獣界の幻獣の混血児ということか。何ということだ！ 幻獣界の幻獣が嫌っている人間界の人間を愛してしまうとは」

「パトモスは幻獣界の女王でありながら幻獣界の幻獣が嫌っている人間界の人間を愛してしまい、人間界の人間と幻獣界の幻獣の混血児を産んでしまったゴルティナに衝撃を受けた。

「パトモスは驚いてしばらく言葉が出なかった。

「ごめんなさい、パトモス」

ゴルティナはパトモスに幻獣界の幻獣が嫌っている人間界の人間を愛してしまい、人間界の人間と幻獣界の幻獣の混血児であるミナキを産んでしまったことを謝った。

パトモスはベリアルに重傷を負わされて、人間界に倒れていたゴルティナの命を救ってくれた人間界の人間のことをしばらく考えて、

「謝ることはない。人間界の人間はおまえの命の恩人だ。おまえが幻獣界に戻ってこれたのは人間界の人間のおかげだ。人間界の人間には礼を言わなくてはならない」

と言った。

「パトモス」

「ミナキはベリアルに拉致されてしまった私とおまえの子の代わりだ。私はミナキを受け入れる。幻獣界の将来のためにも我々の後継者になってもらわないといけないからな」

「パトモス、ミナキと一緒に育てましょう」

「ああ」

「人間界が魔界と戦うことになれば、私は人間界の人間に力を貸すわ」

「私もだ。そういうことになれば、幻獣界も魔界と戦うことになるからな」

「ミナキは幻獣界の幻獣を幻獣界から異世界に呼び出す召喚魔法が使えるわ」

「そうか。リスが幻獣界からいなくなったのは、ミナキが召喚魔法を使って、人間界に呼び出したからか」

「ええ」

「ミナキが召喚魔法を使って、リス以外の幻獣を幻獣界から異世界に呼び出せるようになったら、幻獣界が人間界と共に魔界と戦う時に役に立つだろう」

「ええ。ミナキにこれから幻獣界のこと、リス以外の幻獣のことを知ってもらわないといけないわね」

「ああ」

ゴルティナはパトモスに人間界の人間のこと、ミナキのことを話し終わると、寝室で寝ているミナキの様子を見に行こうと思い、

「パトモス、ミナキのところへ行きましょうか」と言った。

「そうだな」

パトモスとゴルティナは王室を出て、ミナキが寝ている寝室に向かった。

寝室に入ると、ミナキとリスは目を覚ました。

「パトモス王、お母さま」

「ミナキ、目が覚めたのね」

「私は？」

「リスと人間界から幻獣界までの道中疲れて、倒れこむように寝てしまったから寝室に寝かせた

わ」

「そうだったのね」

ミナキが起き上がると、リスはミナキの頭に乗った。

「リスはミナキになついているのだな」

「ええ。ミナキが召喚魔法を使って、人間界に呼び出したからミナキのことを主人だと思つていのよ」

「そうか」

パトモスはミナキの頭に乗っているリスを見て笑った。しばらくしてから、

「私はこれからゴルティナと一緒にミナキを育てる」

「パトモス王がお母さまと一緒に私を育てるの？」

「そうだ」

「ミナキ、パトモスはあなたのことを我が子のように思っているわ」

「お母さま。本当に？」

「本当だ」

「パトモス王、お母さま」

ミナキがパトモスとゴルティナの顔を見上げると、

「ミナキ」

パトモスとゴルティナは笑顔でミナキの顔を見下ろした。
こうしてミナキは幻獣界でパトモスとゴルティナに育てられることになった。

ベリアルによって幻獣界から拉致されたパトモスとゴルティナの子メディアは魔界でベリアルに育てられていた。幻獣界で生まれてすぐにベリアルに魔界に連れてこられたので、父であるパトモスと母であるゴルティナのことは知らなかった。

メディアは魔界のベリアルがいる城にベリアルといた。

「ベリアルさま」

「ん」

「わからないので教えて欲しいことがあります」

「何だ」

「自分の生い立ちです。私は魔界で生まれたのか？ 私を産んだ父母は誰なのか？」

「教えてやる。おまえは魔界ではなく、幻獣界で生まれた。おまえを産んだ父は幻獣界の王。パトモス、母は幻獣界の女王ゴルティナだ」

「何ですって？ では、どうして私が魔界であなたに育てられているのでしょうか」

「おまえは捨て子だった。だから私が拾い、魔界で育てたのだ」

ベリアルは人間界と戦うために魔界に力を貸さなかったことを幻獣界の王パトモス、幻獣界の女王ゴルティナに後悔させるために、メディアに真実とは違うことを話した。メディアは真実かどうか疑問に思い、

「本当ですか？」

と言うと、ベリアルは、

「本当だ」

と言った。

メディアは拳を強く握り、

「私を捨て子にした父母を許さない」

と父パトモスと母ゴルティナを憎んだ。

「幻獣界の王パトモス、幻獣界の女王ゴルティナの息の根を止めてやる」

メディアは父パトモスと母ゴルティナを倒すことを決意した。

(ふふふ。それでいい)

魔界が人間界と戦うことになれば、魔界は幻獣界とも戦うことになる。そういうことになれば、幻獣界の王パトモス、幻獣界の女王ゴルティナを倒すことになる。メディアが幻獣界の王パトモス、幻獣界の女王ゴルティナを倒してくれたら手間が省けて、ベリアルにとって良いことだ。

「おまえは父母にメディアと命名されたが、おまえは私に育てられている。だから、私の命令に

従わなければならない。ミディアンと名乗れ」

「わかりました。私を捨てて子にした父母が命名したメディアなんて名乗りたくない」

「よし」

ベリアルはメディアを従わせるため、ミディアンと名乗らせた。しばらくしてから、

「その昔、魔界と人間界が争った」

「その昔に魔界と人間界の戦争があつたのですか」

「そうだ」

「どうなつたのですか」

「魔界の魔王ベルゼブルが人間界の聖女ナワクラティスに倒され、魔界は負けた。だから私の父魔王サタンは人間界と戦おうとしているのだ」

「ベリアルさまも人間界と戦うのですか」

「そうだ。私の父は魔王ベルゼブルの子孫だからな」

「私も魔界のために戦います」

ミディアンはベリアルと共に人間界と戦う決意をした。

「そうか」

「はい。私はベリアルさまに従います」

ミディアンがベリアルにひざまづく、ベリアルはミディアンの頭にポンと手を置いた。



ミナキとメディアは父親違いのゴルテイナの子であり、姉妹である。だが、互いに存在すら知らない。人間界、魔界、幻獣界が戦うことになると、メディアがミディアンと名乗って、ベリアルのしもべとなり、パトモス、ゴルテイナと戦うことになるので、ミナキはメディアと対峙することになるだろう。

ゴルテイナと一緒に人間界から幻獣界に移住したミナキは幻獣界に慣れなかった。城の窓から見える景色は日があたらぬので、いつも暗い。人間界のリディアの家の窓から見える景色とは違う景色だった。何よりもつらいことはガザとスターに会えないことだった。

(お父さまとスター、今どうしているのかな。会いたい。人間界に戻りたい)

ミナキはガザとスターに会うために、人間界に戻ろうと幻獣界から抜け出したいと思ったが、まだ幼いミナキには幻獣界と人間界を行き来することができなかった。

ミナキは人間界に戻れない、ガザとスターに会えない悲しみに涙した。

「どうしたの」

ゴルテイナがいつのまにかそばにきていた。

「お母さま、私、人間界に戻りたい。お父さまとスターに会いたいの」

「今は人間界に戻れないわ。だからガザとスターに会えない」

「そんな……」

「泣かないで。大きくなれば、人間界に戻れるから。ガザとスターに会えるからね」

ゴルティナはミナキの涙を拭いてあげて、頭を撫でてあげた。

ミナキの肩にリスが乗ってきて、チュツチュツと鳴いた。

「ほら、リスが泣かないで。と言っているわよ」

リスは慰めるようにミナキの顔を舐めた。

「リス」

ミナキはリスの頭を撫でた。

しばらくして、ミナキが泣き止むと、

「ミナキ、大きくなれば、人間界に戻ってもいいぞ」

パトモスがいつのまにかそばにきていた。

「本当に？」

「本当だ」

ミナキは人間界のガザ、スターに会えるのを楽しみにしながら、大きくなるまでは、パトモス、とゴルティナに幻獣界の将来のためにここ幻獣界にいることを約束した。

何年か先、人間界と魔界がまた戦うことになり、魔界の魔王を倒すという運命の瞳を輝かせることになるなんて、ミナキは今、知る由もない。

Reminiscence IN DESTINY PUPIL

著 者 アクア

イラスト まりも

発行日 2018年11月12日

メール webaqua@iris.ocn.ne.jp

ウェブ <http://www.webaqua.server-shared.com/>

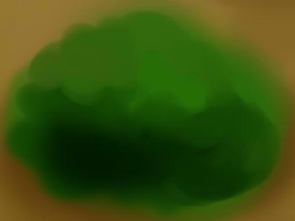
※無断転載・複製・複写・ウェブ上でのアップロード、
ネットオークション・フリマアプリでの転売禁止。

DESTINY PUPILの本編。魔王との戦い。少女期のミナキ・フィラデルフィアが、魔王を倒すという運命の瞳を輝かせる。



DESTINY PUPILの
本編です。
読んで下さいね。





Reminiscence

IN DESTINY PUPIL